

新しい時代 新文化運動と哲学

5、救済論について

天声神語

" 聖なる天神の心霊に蘇れ "

" 聖なる神は即ち、生命であり、その神は永遠な存在であるから、聖なる天神は永生する神である。そして、天神の霊を受けた者は、永生することになっているのだ。

だが、聖神だから永生するのであって、罪人の身では永生することができないのだ。罪の報いは死であるので罪人は死ぬしかないのである。そこで、罪人が神を信じて天国に行くのではなく、罪人の殻を脱いで聖神になることが救いであり、永生が成立するのである。

聖書では、人間が罪人の殻を脱いで聖神になることを「聖霊に蘇れ、昇格せよ」と表現してある。聖霊に蘇れることは「再び神になる」ことであり、父なる神が「我」という意識から抜けて、釈放されることを言っているのである。

" 聖なる神は永生される神であるので、人間が「聖なる神に蘇れれば」これ即ち、永生である。だが、どのようにしたら聖神に蘇れることができるのか？有限な存在の人間が、どうして永遠な存在であられる聖霊に化することができるというのだろうか？

救い主

天声神語

" 聖霊に蘇れ "

罪人の人間が神と合一一つになれと言われたのは、「我」という罪人の意識を脱ぎ捨て、永遠に死なない本来の神に帰れと、聖書は言っているのである。

従って、人間を死なないようにする

者こそが救世主であり、罪を滅する能力を持った者が主人公であるのだ。

天の人は必ず罪を解決する能力を持って顕れることになっているが、罪が「滅した」と言って滅するのではなく、「信じます」と言ったからといって救いを得るものでもない。

天の人は罪を犯せぬ秘訣を正確に教える者が救世主であり、罪を滅し、心の変化を起こしてくれる者が、まさに真実の救世主であるのである。

そこで、真物と偽者を何によって論ずるか、それは、罪を滅すれば、死も滅したのであるから、永生を実現してくれる者が、まさに救世主であるのである。これこそが最も聖書的な救世主論であり、最も妥当な言葉である。「己が救世主だ」「己が勝利者だ」と叫んだからなるものでない。

死の権勢を瞬間にして滅する者、即ち、死なないようにする、その者が、まさに救世主であるのである。死んでゆく人々を再び生かす、この権能は生命の神のみができるものであり、決して人間の能力ではできないものである。これは一時的な治癒の権能ではない。生命の神が直接、役事なされるもので、身体と心が若返るのである。

この世でも実力者が世を治めるように、この宇宙も実力者が治めるものだ。実力がなければ、生きながら永生という言葉、容易に口外することはできないのである。

いままでは実力者がいなかったのだ。実力がないから罪を解決できなかったし、罪を解決できなかったので、人間たちは死ぬしかなかったのである。

人間たちは哀れにも死んでゆくのだが、口だけで「永生である」「救いだ」と騒ぐだけで、その実は、何もしていないのである。



だが、ついに、ここに勝利の神が顕れ、死亡の権勢を余すところなく破壊するので、勝利者がいるこの近辺には死の影すら寄り付かないのである。勝利者がこのような天声神語を説法していた1991年までは、勝利祭壇、ここで、人が死んだことがありませでした。

ここに、葬儀班がありましたか？(ありません)

ここで、お婆さん、お爺さんたちが年をとっていましたか？(若くなっています)

ここで、治らない病気がありましたか？(ありませんでした)

ここでは決して死があるはずがありません。

ここに毎日、来ていた人が急に事故で死んだとすれば、その噂を聞いて、明日から来る人がいなくなるでしょう。

そこで、いくら美辞麗句を並べ、いくら頭がよくても人間に永生を与えず、不幸と苦痛を解決することができなければ、かれは救世主の資格がないのである。

たとえ、口下手でも、雄弁でなくても永生を与えてくれる者がいるとすれば、かれこそが、まさに救世主であり、メシア、勝利者であるでしょう。

解脱重生=復活=救済

ところが今日、聖書の真の目的とは距離の遠いところで、何人かの人を偶像化し、神の志とは距離のあるところで、「神を信ずる」「聖書を信ずる」「救いが得られる」等等、とんでもないことを聞いて、とんでもない道を歩いているのを見るにつけ、実に嘆かわしいことといわざるを得ない。

洗礼を受ければ救いだし、「信じます」と答えれば救いが得られるという式の宗教は、宗教ではなく迷信である。巫師たちが紙片を貼りつけければ治るというような巫俗信仰と、どこが違うのだろうか？

聖書を根本的に理解するには、まず罪が何か、義が何かを明白に解らなければならぬ。聖書全体が霊の言葉であり、霊の言葉であるから、人間の心を描いた言葉である。だから、罪も心であり、義も心である。

罪とは何か、心は心であるが悪の心であり、罪は慾心から起こると言うのだから、悪の心は即ち、慾心の心であり、慾心の霊は罪の霊であり、罪の霊が死の霊であるから、死の霊が、まさに悪魔である。悪魔自体が罪であることが、聖書がいうところの最も核心的な教えである。

つまり、罪と慾心と、悪の心と悪魔

が、それぞれ別個の存在ではなく、罪=慾心=悪の心=悪魔=死亡と、ひっくるめて一つになるのである。

このように、罪だけが霊ではなく、天国も霊であり、地獄も霊であるから、事実は神も心であるのである。

聖神が心であるということが、どこに書いてあるかといえば、「天国はここにあり、そこにあるとはいえず、爾らの内にあるなり」とあり、天の神がおられるところは、どこでも天の国である。神は人の心の内を抜きにしては、ここにある、あそこにあるなどと、勝手に言うな、と明白に釘を刺しているのである。

「ここにある、あそこにある、とは言えぬ」

このように、はっきりと神自身が、人間の心の内にいると明言しているにも拘らず、人間の眼は悪魔の幻惑の中にあるので、その聖書の文脈を正しく指摘し解釈してくれる者がいなかったのである。聖書には相矛盾する言葉が混沌としているので、誰もその脈絡を掴めなかったのである。

聖なる神がまさに人の心の内にあるので、聖書は人間に対し、「汝らは聖霊に蘇れ」と言ったのである。もし、神が人間の内にいないとしたら、どうして人間に対し、さらに聖なる神霊に生まれ変われと言えらるだろうか？聖霊に蘇れということは、人間に対し聖なる神として生まれよということで、これは、即ち、人間が聖神の心を抱いて聖神になれということである。

人間の心の内に聖神がおられることを、何をもって知ることができるかといえば、「聖神の言葉を受けた者は即ち、神である」と言っているのだから、聖神の言葉は即ち、聖神の心であるので、聖なる神の心を抱いたものは、人間でなく聖なる神だといっているの

である。

それは、人間の内に、聖なる神霊になる可能性があるから、人間をして善神の言葉を受けよ、と言ったのである。

聖なる神の言葉を受ければ、「聖霊に蘇った」ことであり、聖霊に蘇れば「聖神の内に入り」になるから、既に人間の殻を脱ぎ聖神の心霊になることが、まさに、聖書上の救済論であるのだ。

だが、現在の人間の心は聖神の心ではなく「己」という心を抱いているから、聖神になれる可能性を自ら遮っているのである。

だから、「己」という自我意識の心を抱かず、聖神の心を抱いてこそ救いであり、復活だといえるのである。

ここでの復活は人間の復活ではなく、神様の復活を言っているのもで、本来、聖なる神であった人間が悪魔であるところの「自我」という意識に捕らわれて一旦は死んでいたのが、再び「自我」という意識の悪魔を破って、聖神の心霊が再び生き返ることを復活というのである。

とすれば現在、人間の心を操縦している「自我」という意識は聖神の心霊ではなく、悪霊に属しているということは、どこにあるかといえば、

「己を常に捨てよ」
「我を愛することが万悪の悪である」とあるから、聖神の意は自我を捨てよ、と切に頼んでいるのである。

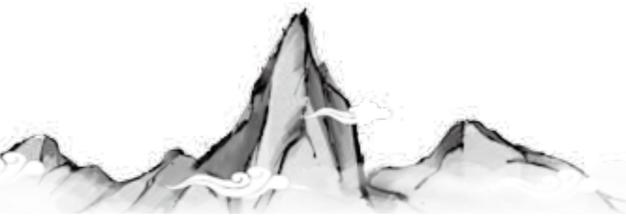
聖神の立場から見れば「自我」を愛することは悪魔を愛することになり、世の全ての悪の中でも最高の悪だと極端な言い方をしているのだ。

聖書で悪というのは悪魔を指しており、だから「自我」という意識の悪魔だという意味にもなるのである。*

次の号に引き続き掲載
Subaru Kan / 新人類文化研究所長

격암유록 新 해설
수정판 제 22회

외부세계에만 관심두고 내면세계를 등지면 반드시 죽으리라



오월력근능 육일비지인
七日一小重力 是皆不妄矣
칠월일소중력 사계불망의

사람으로서 꼭 지켜야 할 일곱 가지가 있는데 첫째 천심 즉 하나님의 마음, 양심 대로 살아야 할 것이요 둘째 재물을 탐하지 말 것이요 석피(石皮)는 파괘트릴 파쇄자를 뜻한다. 셋째 명예를 탐하지 말 것이요 넷째 자연을 벗하며 사랑할 것이요 다섯째 부지런히 일을 할 것이요

여섯째 심령이 변화되도록 할 것이요 비지인(己之人)은 화(化)자를 뜻한다. 일곱째 진리에 대해 확고부동한 마음을 가져야 할 것이요 일소중력(一小重力)은 부동(不動)의 파자이다. 이 모든 계율을 잘 지켜 명령됨이 없어야 할 것이니라.

又有 十戒 一曰立心 우유 십기일월일심
二曰一牛兩尾心 一월일우랑미심
三曰賣心 四曰過欲 삼월매심 사월과욕

五日貪利 六日爭鬪 오월탐리 육일쟁투
七日怠惰 八曰輕交 칠월태타 팔월경망
九日密居 十日錢禾刀也
구월밀거 십월전화도야
死殺不生 崑確實乎 사살불생 기확실호
有志君子 深覺深覺 유자군자 심각심각
愼之察之 暗暗不知世事也
신자찰지 암암부지세사야

또 금기사항 열 가지가 있으니 첫째 자존심을 세우는 것이요 둘째 두 마음을 가지는 것이요 셋째 양심을 파는 것이요 넷째 지나친 욕심을 부리는 것이요 다섯째 이익을 탐하는 것이요 여섯째 남과 다투는 것이요 일곱째 게으르고 타성에 젖는 것이요 여덟째 경거망동함이요 아홉째 은밀히 동거함이요 열째 이자를 받고 돈놀이 하는 것이다. 전화도(錢禾刀)는 전리(錢利)의 파자.

이런 사람은 죽고 죽이는 세상에서 영생할 수 없음이 어찌 확실치 않겠는가?

未運論(말운론)

難黑易白 心滿危 謙滿安
난흑역백 심만위 겸만안
惡滿天必賜死 악만천필사사
活我者誰 三人一舌 팔아자수 삼인일석
殺我者誰 小頭無足 살아자수 소두무족
害我者 似獸非獸 亂國之奴隸
해어자 사수비수 난국지노예
速脫難詳者牛之加一
속탈수군자우지기일
遲脫難詳者危之加厄
지탈수군자위지기억
萬物之靈 失倫獸從者 必死
만물지령 실륜수종자 필사
人衣夕卜 背面必死 인의석복 배면필사
玄妙精通 誰可知 현묘정통 누가지

흑이 백으로 변화기는 어려우니라. 마음에 욕심이 가득차면 위태롭고 마음에 겸손이 가득차면 평안하리라. 마음을 비우고 겸손해야 살 수 있다는 말이다. 마음에 악이 가득차면 하늘이 반드시 죽음을 내리느니라. 나를 살리는 자 누구인가? 삼인일석 즉 다투는 수(修)자이다. 몸과 마음을 잘 닦아야 살 수 있는 것이다. 즉 수신(修身)을 말함인데 유교의 핵심은 3강령 8조목이다. 3강령은 '대학지도제명명덕재신민재지어지선(大學至道在明明德在新民在至於至善)'이요 8조목은 격물 지지 성의 정심 수신 제가 치국 평천하(格物致

知 誠意 正心 修身 齊家 治國 平天下)이다. 수신은 격물 치지 성의 정심을 거쳐야 수신으로 나아가고 수신한 연후에 제가 치국 평천하를 할 수 있는 것이다.

나를 죽이는 자 누구인가? 소두무족(小頭無足)이다. 즉 천화(天火)이다.

나를 해하는 자 누구인가? 짐승 같으나 짐승이 아니며 어지러운 나라의 노예와 같다. 짐승 같은 무리들에서 속히 벗어나는 자는 살게 되지만 늦게 벗어나는 자는 위태롭고 액운을 당하리라. 만물의 영장으로서 인륜과 천륜을 저버리고 짐승 같은 자를 따르는 자는 반드시 죽으리라. 밖(외부세계)에만 의존하고 내면세계를 등지는 자는 꼭 죽으리라.

다시 말하면 내면의 양심의 소리, 하나님의 소리에 귀를 기울이고 잘못을 고치려 하지 않고 외부세계에만 정신이 팔려 있으며 관심을 가지는 자, 외면치례에 마음을 쓰는 자는 반드시 죽는다는 것이다. 인의석복(人衣夕卜)은 의외(意外)의 파자. 현묘한 천지의 이치와 마음의 비밀을 자세히 통달한 자 누구인가?

七要 一曰天心 二曰石皮之衣
칠요 일월천심 이월석피지의
三曰石皮巾 四曰卅日十花
삼월석피건 사월초일십화
五曰力勤農 六曰匕之人

먼저 첫 번째 물어보나니 말세에 제왕이 있으니 어느 때인가? 오미신(午未申)의 3년이다. 즉 갑오동학혁명과 청일전쟁(1894), 을미년의 민비시해 사건(1895) 병신년의 고종의 아관파천(1896)이다.

동방의 조선이 회색하여 온 사방에 기초를 세우는 때는 어느 때인가? 서우호(鼠牛虎) 삼년이다. 무자년(1948) 대한민국 정부수립, 기축년(1949), 경인년(1950) 6.25사변이다. 이씨조선은 몇 대에서 망하는가? 28대왕에서 망하느니라. 이조의 꽃이 다시 피는 때는 언제인가? 무자년(1948)에 이승만 대통령이 섭정하는 때이니라.*

未世 初問何時 午未申三
말세제 초문기하시 오미신삼
東國回生四方立礎 동국회생사방립초
問其何時 鼠牛虎三 문기하시 서우호삼
李朝之亡何代 四七君王
이조지망하대 사칠군왕
李花更發 何之年 이화갱발 하자년
黃鼠之攝政也 황서지섭정야

박명하 / 고서연구가
myunghpark23@naver.com
010-3912-5953

당신을 영생의 세계로 안내하는 신문

성금계좌 : 우체국 103747-02-134421 예금주 : 이승우

승리신문은 독자님들의 정성어린 성금으로 만들어집니다

전국 각지에서 성금을 보내주신 분께 감사드립니다

승리신문		1990.3.3 등록번호 다 - 0029
발행인 겸 편집인 김중만		
본지는 구세주(정도령, 미륵불)께서 말씀하신 사람됨이 실제로 죽지않는 원리(영생학)를 누구든지 쉽게 배우고 실천할 수 있도록 소개하여 질병과 죽음이 없는 개벽된 세상을 만들고 진정한 평화의 세계를 구현하는데 기여함을 목적으로 발행됩니다.		
경기도 부천시 소사구 안곡로 205번길 37 우 14679 홈페이지 www.victor.or.kr		광고 및 구독신청 전화 032) 343-9985 FAX 032) 349-0202
본지는 신문윤리강령 및 그 실천요강을 준수합니다.		